

村田沙耶香『コンビニ人間』論

——「普通」と「異常」の間で——

橋 本 夏 希

一 はじめに

『コンビニ人間』は、雑誌『文學界』の二〇一六年六月号に掲載された村田沙耶香の小説で、同年七月に第一五五回芥川龍之介賞を受賞した。本作は、語り手である「私」（古倉恵子）による一人称独白形式によって物語が展開し、「私」が大学一年生から三十六歳の「現在」までの十八年間「スマイルマート日色町駅前店」というコンビニエンスストア⁽¹⁾でアルバイトを継続している日常が描かれている。また、作品序盤の「コンビニ店員として生まれる前のことは、どこかおぼろげで、鮮明には思いたせない。」⁽²⁾という一文により、本作には語り手による回想部分が内包されていることも明らかである。表題である〈コンビニ人間〉という言葉は、作中で定義されていないため〈コンビニ店員〉と〈コンビニ人間〉

の境界が曖昧なまま物語は終わりを迎える。すなわち、読者が表題の意味を規定することによってはじめて、本作は完結すると言えるのである。本稿では、便宜上作中の言葉によってそれを規定することが妥当であると考え、「コンビニ店員という動物」⁽³⁾を〈コンビニ人間〉と定義し用いることを前提としておく。「私」は家族友人、コンビニの三つの社会に属しており、それぞれのコミュニティで「私」が従うべき規範は異なっていた。それは「私」が店員としてコンビニに適應しながらも、同僚たちの輪の中には結果として溶け込めていなかったことから明白である。また、村田沙耶香作品の一貫したテーマである〈「普通」や「異常」は相対的な概念である〉ことは本作でも同様にテーマとして描かれている。したがって、本稿で用いる「普通」や「異常」も、絶対的なものではなくあくまでも〈私〉（や白羽）に対する周囲の認識）であ

ることを述べておきたい。

村田作品の中でも、特に初期の『授乳』、『星の吸う水』、『殺人出産』では、読者に不快感をすら覚えさせるような性描写が見受けられる傾向にある。また、村田作品に共通する事項として、「普通」を体現できない（しない）すなわち、周囲と協調することが困難な人物が必ず登場する点が挙げられ、それは本作における「私」であることは言うまでもない。性的な描写が作品の多くを占める初期作品とは対照的に、『コンビニ人間』ではそのような描写が殆ど見受けられない。しかし、本作では男女の「性」の描き方が初期作品と異なるのであって、決して性的な要素が作品から排除されたのではない。つまり、本作以前の作品において村田氏は、「性」を肉体的な側面に焦点を当てて描写する一方で、本作ではそれを結婚や就職など社会的な側面から捉え、世間一般における男女への認識の相違を描いているということである。

「古倉恵子」や「白羽」といった個人を特定する名前を持った人間は、本来であれば他者によって代替される存在ではないはずである。しかし本作で、店員や客はコンビニを構成する要素として必要不可欠でありながら（代替可能な存在）として描かれている。それは「コンビニ」という社会に個人が身を置く場合、そこでは「店員」や「客」といった複数の人間の総称である「記号」を与え

られるからである。つまり、本来は代替不可能な個人が、自己を規定する記号を付与されることで、〈代替可能な存在〉へと変容するということである。言い換えると、個人にはもとより代替性が備わっているのではなく、他者との関わり合いの中ではじめて代替性を持った存在として規定されるのだ。「殺人出産システム」が導入された世界や、『マウス』に描かれているファミリーストランも人間の代替性によって組織として成立している。その点においては『コンビニ人間』も同様であるが、特に本作では「変わった」「変わらない」という言葉が何度も繰り返されることで、店員や客商品などコンビニを構成する様々な要素が入れ替わっていることが強調され、その〈入れ替わり〉によってコンビニの営業が成立しているという構造まで如実に描かれている。このことから、本作で描かれたコンビニにおける人間の代替性は、社会の中での一例であつて他にも学校や職場、家庭などあらゆる社会において個人は〈代替可能な存在〉として位置付けられていることが想起されるだろう。つまり、本作は「コンビニ」という特定の社会に焦点を当て、そこで個人が「店員」や「客」という記号を与えられることで〈代替可能な存在〉に変容していく姿を描いていながら、結局のところそれは、コンビニ以外の社会でも行われていることであるという普遍性を読者に提示していると考えられるのである。

本稿では、『コンピニ人間』に至るまでの村田沙耶香作品の変遷について焦点を当てる。「殺人出産システム」が導入された非日常の世界が描かれた『殺人出産』と、小学校や大学といった日常が舞台となっている『マウス』を本作と比較することで、『コンピニ人間』に至るまでの村田作品の変遷を明らかにする。本作ではそれ以前の作品と同様に、「普通」や「異常」といった概念が登場しその再考が求められていながら、同時に〈社会には普遍的に変わらないことがある〉という「普遍性」が提示されている点が特異であると言える。このことを明らかにするために、村田作品の中で本作がどのように位置づけられるかを考察し、本作が峻している社会的問題について検討する。

二 『コンピニ人間』に内包される社会的問題

——『殺人出産』『マウス』との比較から——

村田氏の作品には、〈性描写〉、〈人間の代替性〉、〈模倣〉、〈普通と異常〉など繰り返し類似したキーワードやモチーフが登場する。本稿では三作品における〈性描写〉と〈模倣〉に焦点を当て比較することで、『コンピニ人間』に至るまでの村田作品の変遷を明らかにする。はじめに『コンピニ人間』と『殺人出産』の性描写を比較する。尚、引用の傍線・二重傍線は論者によるものである。

① 昔の人々は恋愛をして結婚をしてセックスをして子供を産んでいたという。けれど時代の変化に伴って、子供は

人工授精をして産むものになり、セックスは愛情表現と快樂だけのための行為になった。避妊技術が発達し、初潮が始まった時点で子宮に処置するのが一般的になり、恋をしてセックスをすること、妊娠することの因果関係は、どんどん乖離していった。(『殺人出産』十二頁)

② 偶発的な出産がなくなったことで、人口は極端に減っていった。人口がみるみる減少していく世界で、恋愛や結婚とは別に、命を生み出すシステムが作られたのは、自然な流れだった。もつと現代に合った、合理的なシステムが採用されたのだ。殺人出産システムが海外から導入されたのは、私が生まれる前のことだ。もつと以前から提案されていたものの、10人産んだら一人殺してもいい、

というこのシステムが日本で実際に採用されるのには、少し時間がかかった。(中略)殺人出産システムが導入されてから、殺人の意味は大きく変わった。それを行う人は、「産み人」として崇められるようになったのだ。

(『殺人出産』十二頁—十三頁)

③ 恋愛とセックスの先に妊娠がなくなった世界で、私たち

④

には何か強烈な「命へのきつかけ」が必要で、「殺意」こそが、その衝動になりうるのだ、という。(中略) 日本では依然として人工授精での出産が1位を占めるが、それでも「産み人」から生まれた子供の比率は少しずつ増え、昨年度の新生児の10パーセント以上を占めるようになっていた。当然だが、それは命懸けの行為であるので、「産み人」としての「正しい」手続きをとらずに殺人を犯す人もいる。逮捕されると、彼らには「産刑」というもつとも厳しい罰が与えられる。女は病院で埋め込まれた避妊器具を外され、男は人工子宮を埋め込まれ、一生牢獄の中で命を産み続けるのだ。(『殺人出産』十三頁)

「私は、人工授精じゃなくてちゃんとセックスして子供を産みたいんです」「えっ?」意味がわからなかったようで、新人の女の子が目を瞬かせる。言い聞かせるように、ゆつくりと早紀子は繰り返した。「人工授精とか、センターとか、そういう不自然な方法ではなく、ちゃんと正しく恋愛をして、子供を産みたいんです」皆、恋愛とセックスという言葉と子供を産む行為が咄嗟に結びつかず、顔を見合わせている。(中略)「珍しいですねえ。あ、でも、海外セレブでいました、そういう人。自然妊娠?」って

「いうんですか? 人工授精をあえてしないことで、すごい話題になってみたいですよ」(中略)「えい、恋愛のセックスと妊娠のための人工授精って、別モノじゃないですか? あ、別に早紀子さんがおかしいとかそういうわけじゃないですけど……」

(『殺人出産』六十四頁―六十五頁)

②のように、「殺人出産システム」とは、十人子どもを産んだら自分が殺したい一人の人間を合法的に殺すことが可能なシステムのことである。このシステムが導入された世界においては、少子化が進んだ国家の存続に寄与する目的で、人間の「総数」を維持することが何よりも重要視されるため、一人の人間を合法的に殺すには、新たに十人の子供を産むという「産刑」に課せられることとなる。また『殺人出産』では①③から伺えるように、恋愛や結婚の延長上に妊娠がない世界が描かれている。セックスは子供を作るための行為ではなく、愛情表現と快楽を得るという目的による行為になったため、子供は人工授精で産むことが主流となったのである。しかし、④で早紀子はそのような考えを一蹴し、セックスをして子供を産みたいということを同僚たちに繰り返す主張する。また③の二重傍線部から伺えるように、女性に限らず男性も人工子宮によって子供を産むことができるのである。つまり、

女性が生得的に備わっている子宮はもはや女性特有のものではなく、後天的に男性も取得することが可能な器官と言えるのだ。

次に、『コンビ二人間』における性描写について考察する。

① 「付き合ったこととか……恵子からそういう話、そういう

ば聞いたことないなって」「ああ、ないよ」反射的に正直に答えてしまい、皆が黙り込んだ。困惑した表情を浮かべながら、目配せをしている。ああそうだ、こういうときは、「うーん、いい感じになったことはあるけど、私が見る目がないんだよねー」と曖昧に答えて、付き合った経験はないものの、不倫かなにかの事情がある恋愛経験はあって、肉体関係を持ったこともちゃんとありそうなの雰囲気です。返事をしたほうがいいと、以前妹が教えてくれたのだった。 (『コンビ二人間』三六頁)

② 「皆が足並みを揃えていないと駄目なんだ。なんで三十代半ばなのにバイトなのか。何で一回も恋愛をしたことがないのか。性行為の経験の有無まで平然と聞いてくる。

『ああ、風俗は数に入れないでくださいね』なんてことまで、笑いながら言うんだ、あいつらは！ 誰にも迷惑を

かけていないのに、ただ、少数派だというだけで、皆が僕の人生を簡単に強姦する」 (『コンビ二人間』八十二頁)

③ 「白羽さん、婚姻だけが目的なら私と婚姻届を出すのはどうですか？」 (中略) 「そんなに干渉されるのが嫌で、ム

ラを弾かれたくないなら、とつとつすればいいじゃないですか？ 狩り……つまり就職に関してはわかりませんが、婚姻することで、とりあえず、恋愛経験や性体験云々に対して干渉されるリスクはなくなるのでは？」 「突然なにを言ってるんだ。ばかげてる。悪いですけど、僕は古倉さん相手に勃起しませんよ」「勃起？ ああ、それが婚姻となんの関係が？ 婚姻は書類上のことで、勃起は生理現象ですが」 (『コンビ二人間』八十六―八十七頁)

④ 「古倉さんも、もう少し自覚したほうがいいですよ。あんななんて、はつきりいって底辺中の底辺で、もう子宮だつて老化しているだろうし、性欲処理に使えるような風貌でもなく、かといって男並みに稼いでるわけでもなく、それどころか社員でもない、アルバイト。はつきりいって、ムラからしたらお荷物でしかない、人間の屑ですよ」 (『コンビ二人間』九十八頁)

⑤ 「やった、うまく逃れたぞ！ これでしばらく大丈夫だ。

この女が妊娠なんかするわけがない、だって僕は絶対にこんな女に挿入しないからな！」 白羽さんは興奮した様

子で、私の両肩を掴んだ。「古倉さん、あなたは運がいいですよ。処女で独身のコンビニアルバイトだなんて、三重苦のあなたが、ぼくのおかげで既婚者の社会人になれるし、誰もが非処女だと思っただろうし、周りから見てもな人間になることができるんだ。それが一番みんなが喜ぶ形のあなたなんですよ。よかったですね！」

『コンビニ人間』一三〇頁—一三一頁

⑥ 私はふと、コンビニという基準を失った今、動物としての合理性を基準に判断するのが正しいのではないかと、思いついた。私も人間という動物なのだから、可能なら子供を産んで種族繁栄させることが、私の正しい道なのかもしれない。(中略)「ほら、私たちって動物だから、増えたほうがいいじゃないですか。私と白羽さんも、交尾をどんどんして、人類を繁栄させるのに協力したほうがいいと思いますか？」(中略)「どうやら私と白羽さんは、交尾をしないほうが人類にとって合理的らしい。やったことがない性交をするのは不気味で気が進まなかったの、で少しほっとした。」

『コンビニ人間』一四一頁—一四二頁

①で「私」は、妹からの教えで、性行為の経験がないことは周

囲の人々から快く思われないため、友人たちから異性関係について尋ねられた場合には曖昧な返答をし、非処女であるかのように振る舞う必要があることを認識している。一方で白羽は②で、性行為の経験がないことを他者から嘲笑されたと嘆いており、彼が述べている「少数派」とは、三十五歳で性行為の経験がない(童貞である)ことを示しているのは明白である。「私」と白羽は性行為の経験がないという点で共通するが、性そのものに関する認識は異なっていたと言える。それは③傍線部の二人の会話で、「私」は婚姻関係を結ぶことと性行為を切り離して考えているのに対して、白羽はその二つを繋ぎ合わせて考えているからである。周知の通り、婚姻関係を結んでいる男女が性行為をすることは、何ら違和感のないことであるが、「私」はその考えを③の「勃起? あの、それが婚姻となんの関係が? 婚姻は書類上のことで、勃起は生理現象ですが」という言葉で一蹴する。すなわち、「私」と白羽は性行為の経験がないという点で共に少数派であったが、性に関する認識という観点において「私」は少数派として、白羽は多数派として位置づけられているのである。

『コンビニ人間』の「私」は「殺人出産システム」の仕組みと同様に、結婚と性行為を切り離して考えている。⑥でコンビニ店員を辞めた「私」は、「動物としての合理性」に従うこと、すなわち

白羽との子供を授かることこそが「動物」としての役割を果たすことなのかもしれない、と思いを巡らせている。また、先述したように「殺人出産システム」は、人間の持つ代替性を利用した合理的なシステムであることを前提とすると、「私」の思考と「殺人出産システム」の仕組みは、性に関して極めて合理的であるという共通点がある。しかし、「私」の考える合理性は他者（白羽やその義妹）から認められない一方で、「殺人出産システム」が持つ合理性は社会的に認められており、それは、「産み人」や「死に人」が尊い存在として崇められていることから明らかである。両者の合理性に対する社会的認識が異なるのは、その合理性が制度として成立しているか否かという点が関わっていると考える。ただし、「殺人出産システム」はこのシステムが日本で実際に採用されるのには、少し時間がかかった。殺人反対派の声も大きかったからだ。けれど、一度採用されてしまうと、そちらのほうがずっと自然なことだったのだと皆気付くこととなった⁴⁾というように、制度として成立する以前は、それに反対する声もあったのである。しかし「殺人出産システム」は実際に制度として採用されると、その合理性は世間の人々に受容されていくようになった。つまり、性に関する合理性が社会的に受容されるには、その「合理性」が制度、すなわち社会を構成する人々が従うべき規範として確立す

る必要があるのである。『コンビニ人間』の「私」の持つ合理性はあくまでも「古倉恵子」という一個人のものであり、仮に彼女の合理性を認めなかったとしても社会的に排斥されることはないであろう。一方で、「殺人出産システム」を断固として受け入れようとしなかった早紀子は、最終的に環によって「死に人」に選定され殺された。つまり、「殺人出産システム」という規範に従わないことは、命を落とす可能性を孕んでいるのである。このことから性に関する合理性は、それが社会的な規範（制度）として確立しているか否かによって、受容されるかが決定されると言え、時代の移り変わりによって受容される「合理性」の定義は変化していく、つまり普遍的に受け入れられる合理性は存在しないのである。

先述した通り、「少数派」「多数派」という概念は、複雑に入り組んだ多重構造となっており、この構造は「私」と白羽の関係性に限らず、コンビニの店員間においても見受けられる。

① 「あの人、35歳とかでしたよね。それでコンビニアルバイトって、そもそも、終わってません?」「人生終了だよな。

だめだ、ありゃ。社会のお荷物だよ。人間はさー、仕事か、家庭か、どちらかで社会に所属するのが義務なんだよ」

（『コンビニ人間』五十九頁―六十頁）

② 店長と泉さんがバックルームから出ていくと、白羽さん

が小さく舌打ちした。ふとそちらを見ると、吐き捨てるように白羽さんが言った。「け、コンビニの店長ふぜいが、えっらそうに」コンビニで働いていると、そこで働いているということを見下されるのが、よくある。興味深いので私は見下している人の顔を見るのが、わりと好きだった。あ、人間だという感じがするのだ。

（『コンビニ人間』六十三頁）

③ 「威張り散らしてるけど、こんな小さな店の雇われ店長つ

て、それ、負け組ですよ。底辺がいばってんじゃねえよ、糞野郎……」（中略）「この店つて、ほんと底辺のやつらばっかですよ。コンビニなんてどこでもそうですけど、旦那の収入だけじゃやっていけない主婦に、大した将来設計もないフリーター、大学生も、家庭教師みたいな割のいいバイトができない底辺大学生はっかりだし、あとはお稼ぎの外国人、ほんと底辺ばかりだ」

（『コンビニ人間』六十四頁）

②の傍線部の「私」の言葉のように、コンビニ店員は「コンビニで働いている」ということに関して社会的に蔑まれることが頻繁にあり、それは「私」や白羽だけではなく、泉や菅原、店長も

同様であるはずである。すなわち「私」や白羽、泉、菅原、店長などコンビニ店員は皆、世間から一律に「コンビニ店員」として蔑まれていくことである。しかし、社会的地位が低い「コンビニ店員」の中にも（見下す側）と（見下される側）という構造が存在していると考えられる。①では、白羽が三十五歳という年齢にも関わらず、コンビニのアルバイトで生計を立てていることや、彼自身の怠惰な勤務態度が原因で店を辞めさせられたことを店長や泉、菅原が嘲笑している。一方で③で白羽は、店長のことを「負け組」「底辺」と称し、泉を「旦那の収入だけじゃやっていけない主婦」、菅原を「大した将来設計もないフリーター」と称し、コンビニで働いている店員皆を軽蔑している。つまり白羽は、他の店員から（見下される側）であり、同時に他の店員を（見下す側）でもあるのだ。このように、本作で描かれている「少数派」と「多数派」、〈見下す側〉と〈見下される側〉といった二項対立の概念は、絶対的なものではなく絶えず入れ替わる相対的なものなのである。村田氏の作品で繰り返し描かれるこの〈入れ替わり〉は、『コンビニ人間』の根幹を成しているとともに、「普通」や「異常」などあらゆる概念は普遍性を持っていないということを読者に提示していると言える。

三 おわりに

本稿では、「私」と周囲の人々の関係性を始発として、「私」が社会的にどのような存在として位置づけられていたのかを指摘し、またコンビニでの「私」の位相を読み解くことで、本作に内包される社会的問題について考察した。そして最終的に、本作とそれ以前の他作品を比較することによって、『コンビニ人間』に至るまでの村田沙耶香作品の変遷について明らかにした。回想部分の描写から伺えるように、幼少期から他の子供とは異なつた行動を取り両親を悩ませていた「私」は、他者との関わりを必要最低限度に留め生活していた。その「私」が大学一年生になつた時に、はじめて自分の意思で「スマイルマート日色町駅前店」でアルバイトをすることを決意し、それによって「私」は、店員として従うべきマニュアルを獲得したのである。今まで他者と積極的に交わろうとしなかつた「私」のこの変化は、家族にとつても喜ばしいものであつた。しかし家族は、「私」が三十六歳になつた現在も変わらずにそのコンビニでアルバイトをしていることに嫌悪を抱くようになつた。これは友人たちも同様で、彼らも「私」が独身のままコンビニでアルバイトをしていることに疑問を抱き、度々「私」にその理由を問いただす。明確な目的がないままアルバイト

を続けていた「私」は、その問いかけに対する答えを自己の中に見出せず、麻美から教えられた通りの返答をしていた。このように「私」にとつて麻美は、他者と協調するための規範を示していたが、麻美は「私」の問いかけに応じるものの、白羽の義妹のように「私」の「異常性」について指摘することはなかつた。その点において白羽の義妹は、唯一「私」に対して直接的にその「異常性」を突きつけ、なおかつ「私」がどうするべきかを具体的に指摘した人物であると言えるだろう。

「私」が友人たちと交流をしている目的は「普通の三十代女性」について知り、彼らの模倣をすることによって「普通」の人間を演じ、社会に適応しようとしたからであつた。しかし『普通の人間』という架空の生き物⁶という言葉から明らかのように、「私」は「普通」や「異常」という概念が普遍性を伴わないものであることを認識していた。それでも「私」が模倣をし続けたのは、たとえ普遍的な価値観でなかつたとしても「普通」を体现できない人間は、社会の中での居場所を失つてしまうということに気がついていたからであろう。

このように「私」がコンビニ店員であることは、当初は家族から好意的に受け入れられ社会性を持った「普通」の人間へと近づくと第一歩として捉えられていたが、やがてそれは「異常」として

捉えられるようになった。このような「私」に対する他者の認識の変化は、本作において「普通」という概念が、絶えず移り変わる相対的なものとして描かれていることの表れであり、このような価値観の転換によって「私」は、自らが従うべきマニュアルが時間の経過とともに変わっていることを実感していたと言える。

「私」は物語の序盤から終盤まで一貫してコンビニのマニュアルを忠実に順守している点から、一見するとコンビニという社会に完璧に適応しているようではいながら、実際には同僚たちから一線を引かれていたのである。それは「私」が従っていたマニュアルはあくまでも「店員」と「客」という限定された関係性におけるものであり、コンビニの同僚たちと接する際にはそれとは異なった規範に従う必要があったからである。白羽と同棲していることを同僚たちに告げるまで、「私」はそれに気がつかなかったと考えられ、またこのことは家族や友人のコミュニティーにおいても同様であったはずである。本作では普遍的な「普通」は存在しないことを描きながらも、同時に「人間が社会に適応する上で従うべき規範はコミュニティーごとに存在している」という「普遍性」を提示することで、結果として社会の複雑な構造を浮き彫りにしているのである。また、白羽と「私」の関係は極めて合理的なものであり、両者は「異性と同棲している」という事実によって、周

囲から「普通」の人間のように恋愛経験や性行為の経験があると認識されることを期待していた。ただし、両者の関係は代替可能なものであり、互いを「同棲相手」として認識していたと考えられ、それは「私」が友人たちを「普通の三十代女性」の集合として捉えていたことと重なるであろう。

『コンビニ人間』と『殺人出産』、『マウス』の三作品の比較では、村田作品に繰り返し登場するキーワードのうち、性描写に焦点を当てた。性行為の経験がない「私」と白羽は、社会の中で共に「少数派」であったが、婚姻と性行為についての両者の認識は異なっており、それによって二人は「少数派」のカテゴリーの中でさらに「少数派」、「多数派」という分岐したカテゴリーに属していたことが言える。『マウス』の「私」、「殺人出産」の「私」や早紀子と同様に、『コンビニ人間』の「私」も、同僚や友人たちの話し方などを模倣しており、さらにその模倣は他者からの干渉を避ける目的で意識的に行っているものであると自ら述べている。他者の模倣をしていることを自ら言語化するのには、「私」が意識的に模倣をしていることの表れである。『マウス』で「私」がファミリーレストランのマニュアルを徹底していることや、『殺人出産』で「私」と早紀子が蟬スナックに触れていることは、他者の模倣をしているという点で『コンビニ人間』と共通する。しかし、『マウス』で

「私」が店のマニユアルに従うことや、『殺人出産』で「私」と早紀子が蟬スナックを食べることは、他者の動作を単純に見たままに模倣することである一方で、『コンビ二人間』で「私」が行った模倣は、他者の様子を鋭く観察した上で成立しており、さらに自らの模倣が他者から「模倣である」と悟られないよう配慮している点が異なる。「私はバックルームで見せられた見本のビデオや、トレーナーの見せてくれるお手本の真似をするのが得意だった。」という描写から、「私」は、他者の服装や話し方を全く同じように模倣することも可能であったはずである。しかし、他者の姿を完璧に模倣することは、周囲から「異常」と見なされる可能性を孕んでいることを「私」は理解していたからこそ、特定の一人ではなく複数人の話し方を混ぜ合わせたり、同じブランドの違う商品を身に着けたりしていたと言える。『コンビ二人間』での模倣と『マウス』『殺人出産』での模倣を比較すると、前者の模倣は、意図的でありながらそれを周囲に察知されないよう配慮までしている点が、後者よりも高度な模倣として捉えられる要因ではないだろうか。また②で、意識するか否かに関わらず模倣そのものは誰もがが行っていることだと「私」が述べているのは、自分独自の考えや行動であると認識しているものでも、実際にはそれは他者の模倣をした結果であることを意味している。

『マウス』『殺人出産』での模倣は、結果として語り手「私」がファミリーレストランや「殺人出産システム」が導入された世界で、既に確立された「ウェイトレス」「産み人」という概念の中に自己を投じることを意味している。また、「殺人出産システム」が導入された非日常の世界における模倣と、誰にとつても身近なコンビニという日常における模倣は、「蟬スナック」を食べる描写や、最終的に「産み人」となる「私」が描かれる前者の方が読者の恐怖心を煽るように見えるかもしれない。しかし「私の細胞全部が、コンビニのために存在しているんです」、『コンビニの「声」にもつと完璧に従えるように、肉体のすべてを改造していかななくてはいけないのだ。』という描写から明らかのように、全てが均質化され代替可能なコンビニで行われた「私」の模倣の行き着く先は、肉体そのものがコンビニに同化した「コンビニ店員という動物」すなわち（コンビニ二人間）であり、その同化こそが「私」が生存し続けるための手段であったと考えられる。したがって、『コンビニ二人間』での模倣は最終的に、『マウス』『殺人出産』でのそれとは異なり、人間の肉体そのものを変えてしまう「同化」という究極的な世界を描いていると言えるのではないだろうか。

『コンビニ二人間』では、作中で（コンビニ二人間）という言葉が用いられておらず、その定義は読者が規定するよう求められている。

本稿では「コンビニ店員という動物」を「コンビニ人間」と定義したため、本作で「コンビニ人間」として捉えられるのは、「私」一人に限定されている。しかし読者の解釈次第で、本作に登場するあらゆる人物を「コンビニ人間」として規定することが可能であり、村田氏はそれを期待した上で意図的に表題を途中で定義づけしなかったと考えられる。「コンビニ人間」という表題は、作者から読者への投げかけであり、物語を完結させるのは他の誰でもない読者であることを示しているのである。すなわち本作は、それ以前の村田作品以上に読者の存在が必要不可欠であり、作者自身もその存在を強く意識していたと言えるだろう。

本作は、誰にとっても身近な「コンビニ」という日常を舞台として設定し、そこで巻き起こっている様々な事象を如実に描写している。一人称の語りによって「私」から見たコンビニの姿が描かれ、最終的に「私」は「コンビニ」という社会の中に自己を埋没させることを決意した。肉体そのものがコンビニと常に繋がっている（「コンビニ人間」）の存在を意識した時、嫌悪や不快感を抱く読者もいるかもしれない。しかし（「コンビニ人間」に限らず、読者自身も「生存する上で様々な社会の規範に従っている」）ことに気づかされたその時、『コンビニ人間』は我々が日常的に遭遇している世界を描いたものであることが明らかになるのである。本

作では、村田作品で一貫して描かれる「普遍的な「普通」や「異常」といった概念は存在しない」というテーマから一歩進み、「社会では普遍的な価値観がまるで存在するかのよう錯覚されている」ことをも我々に突きつけている。以上のことから、人間が社会の中で生存していく際には記号を付与され（代替可能な存在）になるという「普遍性」と、「絶対的な「普通」は存在しない」という二つの「普遍性」を本作から見出すことが可能なのである。「私」はコンビニで十八年間働き、一度店員を辞め再びそこへ舞い戻るといふプロセスを経たことで、最終的に「コンビニ人間」という動物「すなわち（「コンビニ人間」）として社会の中に自己を埋没させることこそが、生存のための最も合理的な方法であると判断した」と言える。このことから、「私」のように世間一般の「普通」とは遠ざかった存在であっても、社会で生きていくにはいずれかのコミュニティに属す必要があることが示唆されている。しかし、最終場面の「この手も足も、コンビニのために存在している」というと、ガラスの中の自分が、初めて、意味のある生き物に思えた。¹⁰⁾ という言葉から明らかのように、幼少期から社会との交わりを極力避けていた「私」が、最終的に（「コンビニ人間」）として生きる道を開拓したという意味で、「私」は自らの力で社会での存在意義を見出すことに成功したと言えるのではないだろうか。

注(1) 本稿では「コンビニ」と表記する。

- (2) 『コンビニ人間』七頁
- (3) 『コンビニ人間』一五〇頁
- (4) 『殺人出産』十二頁
- (5) 『殺人出産』において命を落とすこと(「死に人」に選定されること)は名誉なことであるが、早紀子の場合には頑なに「殺人出産システム」を受け入れることを拒否し、自らの命が奪われることを恐れていた。そのため、ここでは「命を落とす可能性」を社会的排斥として捉えた。
- (6) 註十四に同じ
- (7) 『コンビニ人間』十六頁
- (8) 『コンビニ人間』一四九頁
- (9) 『コンビニ人間』一五〇頁
- (10) 『コンビニ人間』一五一頁

〈参考文献目録〉

〈使用テキスト〉

- ・村田沙耶香『マウス』講談社、二〇一一年
 - ・村田沙耶香『殺人出産』講談社、二〇一四年
 - ・村田沙耶香『コンビニ人間』文藝春秋、二〇一六年
- 〈辞典・事典〉
- ・福村惇一『青年心理学事典』福村出版、二〇〇〇年
 - ・山内重陽『精神分析事典』岩崎学術出版社、二〇〇二年
 - ・北原保雄『日本国語大辞典第二版』小学館、二〇〇三年
 - ・下中直人『こころの問題事典』平凡社、二〇〇六年

- ・村田誠四郎『応用心理学事典』丸善、二〇〇七年
- ・池田和博『発達心理学事典』丸善、二〇一三年
- ・柴田敏樹『誠信、心理学辞典』誠信書房、二〇一四年
- ・西村正徳『異常心理学大事典』西村書店、二〇一六年

〈雑誌〉

- ・吉安章『文藝界』文藝春秋、二〇一六年六月
- ・市田厚志『群像』講談社、二〇一六年七月
- ・大橋義光『中央公論』中央公論新社、二〇一六年十月
- ・市田厚志『群像』講談社、二〇一六年十二月

〈書籍〉

- ・西丸四方『異常性格の世界』創元社、一九五四年
- ・山田光哉『社会的学習と模倣』理想社、一九五六年
- ・森山甲雄『児童の社会性と適応』児童心理学選書3』第一印刷、一九六七年
- ・横山滋『模倣の社会学』丸善、一九九一年
- ・福村惇一『性格心理学ハンドブック』福村出版、一九九九年
- ・石井昭男『自閉症ハンドブック』明石書店、二〇〇三年
- ・堀野緑『子どものパーソナリティと社会性の発達』北大路書房、二〇〇四年
- ・杉山登志郎『アスペルガー症候群と高機能性自閉症―青年期の社会性のために』学習研究社、二〇〇五年
- ・矢部敬一『自閉症とパーソナリティ』創元社、二〇〇六年
- ・太郎丸博『フリーターとニートの社会学』世界思想社、二〇〇六年
- ・アーカイブス出版編集部『若者ライフスタイル資料集2008』アー

カイブス出版、二〇〇七年

・永田良昭『現代社会を社会心理学で読む』ナカニシヤ出版、二〇〇九年

・中島義道『差別感情の哲学』講談社、二〇〇九年

・川崎友嗣『フリーターの心理学―大卒者のキャリア自立』世界思想社、二〇〇九年

・中村陽吉『世間心理学とはじめ』東京大学出版会、二〇一一年

・杉田啓三『よくわかる発達障害第2版』ミネルヴァ書房、二〇一二年

・針間克己『こころの科学』日本評論社、二〇一六年

・佐藤隆信『文藝年鑑2017』新潮社、二〇一七年

〈評論・論文〉

・鴻巣友季子「季刊ブックレビュー ネットレスをスーフで煮よ：『コンビニ人間』村田沙耶香」朝日新聞出版、二〇一六年

・星野光徳「自意識の消滅について：芥川賞・村田沙耶香『コンビニ人間』を読む」『群象』第三十七巻、二〇一六年

・呂衛清・安部智子「音」から「声」へ：村田沙耶香の『コンビニ人間』を読む』『比較日本文学研究』第十巻、二〇一七年

・矢野千晶『差の消滅：村田沙耶香「授乳」から「コンビニ人間」まで』『同志社女子大学日本語日本文学』第二十九巻、二〇一七年六月

・永井里佳「村田沙耶香『コンビニ人間』の孤独と増田みず子「シングル・セル」の孤独への一考察」『世界文学』第一二五巻、二〇一七年七月

〈Webページ〉(最終閲覧日：全て二〇一七年十二月九日)

・産経ニュース「5月号 感動は説明できない 早稲田大学教授・石原千秋」〈<http://www.sankei.com/life/news/140427/1404270027-n1.html>〉二〇一四年四月

・産経ニュース「村田沙耶香さん作品集『殺人出産』倫理揺さぶる奇妙な世界」〈<http://www.sankei.com/life/news/140827/140827013-n1.html>〉二〇一四年八月

・産経ニュース『セックスなんてよくできるわね、あんな汚いこと』新刊「消滅世界」で常識に揺さぶりがけて…」〈<http://www.sankei.com/life/news/160214/1602140009-n1.html>〉二〇一六年二月

・AERA dot.「芥川賞作家・村田沙耶香のコンビニ以外の「自分の場所」」〈<https://dot.asahi.com/dot/2016072900325.html?page=1>〉二〇一六年七月

・産経ニュース「息が詰まるような「正しさ」で評価されがちな村田沙耶香の「コンビニ人間」 早稲田大学教授・石原千秋 芥川賞受賞への『講義』」〈<http://www.sankei.com/life/news/160731/1607310026-n1.html>〉二〇一六年七月

・産経ニュース「コンビニ勤務は週3日「コンビニ人間」で第15回芥川賞に決まった村田沙耶香さん(36)」〈<http://www.sankei.com/life/news/160720/1607200004-n1.html>〉二〇一六年七月

・産経ニュース「「コンビニ人間」で受賞した村田沙耶香さん「コンビニへの愛情を形にできた」」〈<http://www.sankei.com/life/news/160719/1607190016-n4.html>〉二〇一六年七月

・産経ニュース「作家 川上弘美さん「過不足のない描写力とユーモアがある」」〈<http://www.sankei.com/life/news/160719/1607190019-n1.html>〉二〇一六年七月

- ・Book Bang「芥川賞受賞作『コンビニ人間』は「普通」や「常識」に「石を投じる問題作」〈<https://www.bookbang.jp/article/516396>〉二〇一六年八月
 - ・産経ニュース「書評家・倉本さおりが読む芥川賞『コンビニ人間』「何で結婚しないの?」「何でアルバイトなの?」―無慮に聞く「普通」の側を見透かす目」〈<http://www.sankei.com/life/news/160807/lif1608070019-n3.html>〉二〇一六年八月
 - ・芥川賞のすゝこのよらなものの「選評の概要」〈<http://prizesworld.com/akutagawa/senryo/senryo155.htm>〉二〇一六年八月
 - ・産経ニュース「現代文学にはもう見切りをつけました」とメッセーシ放つ「群像」の企画 早稲田大学教授・石原千秋」〈<http://www.sankei.com/life/news/160925/lif1609250021-n3.html>〉二〇一六年九月
 - ・日経ビジネス「『コンビニ人間』にみる普通と狂気の境界」〈<http://business.nikkei.jp/atcl/book/15/101989/091400011/>〉二〇一六年九月
 - ・Book Bang「ひっそり異議を唱える芥川賞受賞作『コンビニ人間』」〈<https://www.bookbang.jp/review/article/517103>〉二〇一六年九月
 - ・日本経済新聞「コンビニ対談 奥深きコンビニ「世界」日経MJ編集長 中村直文」〈<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ008069420W6A001C1000000/>〉二〇一六年十月
 - ・日本経済新聞「コンビニ人間」と「コンビニ社長」働き方熱く語る」〈<https://www.nikkei.com/article/DGXMZ007980000U6A001C1H11A00/>〉二〇一六年十月
 - ・産経ニュース「『コンビニ人間』37歳村田沙耶香は今もコンビニで働いているのか コンビニで好きな仕事「○○』」〈<http://www.sankei.com/premium/news/170102/prml1701020017-n1.html>〉二〇一七年一月
- (二〇一七年度卒業)